みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Collecting of European Ethnological Objects 1 (Finland)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 祐一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004667

ヨーロッパの調査収集　（1）

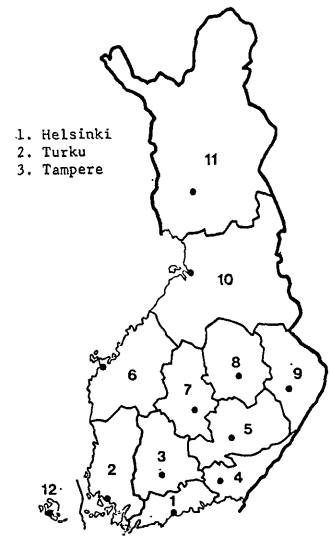
——フィンランド——

和　田　祐　一*

本年（1975年）7月31日より同10月13日まで，筆者は，国立民族学博物館の民具収集メンバーの1人として西ヨーロッパ地域に派遣された。

現地とのコンタクトを始めたのは3月早々であった。勿論，予算の見通しがつく時期から考えて，出発は早くて7月と考えられていたし，実際に7月31日が出発と決まり，それでも収集に出かけるメンバーの中では早い方であった。この種の作業を成功させるには，現地に蓄積してある人間関係の財産を能率的に生かすことと，現地側になるべく早く準備体勢をとらせることである。

私にとって収集の経験は始めてなので，まず，あまり手を拡げない，という原則をたてた（もっとも現実には大変欲ばる結果となったが）。そこで，収集活動の焦点をフランスとフィンランドの2国に絞ることにした。この2国はヨーロッパのセンターとペリフェリーという互に異なった特質を持ち，「ヨーロッパとは何か」という問題を常に自問しながら行動した収集行において，私に「民具の方言地図」という考えを与えるようになったが，このような意義に気付いたのは，実際に民具を手にし，それもフランスでフィンランドと全く同じ型の民具を見るに至ってからのことであって，慣れたフィールドのフランスはともかくも，ペリフェリーの地域として無経験なフィンランドを選んだ理由はもっと現実的なきっかけがあったからである。



ウラルの folklore に既に10年近く打込んでおられる菊川丞氏との間にフィンの民具収集の話が出たのが2月の下旬で，私にとっては思いもかけぬ幸運が収集活動のスタートを早める結果となった。同氏は3月7日に来館されて最終の打合せをすませ，15日にはヘルシンキに飛んで，私が第1報を受信したのが23日であった。この後，私自身がヨーロッパに向けて出発する7月31日までの間に行なわ

* 国立民族学博物館第3研究部

れた現地協力者との連絡で，まずフィン側の収集可能な民具のリストを作ってくれたのが，タンペレの民族音楽博物館の館長に就任されたばかりのレヒトネン（Lehtonen）博士であり，ラップ側の97種に上る収集可能な民具のリストを作成してくれたのは，当時 Castrenianum 研究所におられたサンマッラハティ（Sammallahti）氏であった。その後サンマッラハティ氏はラップランドへ入られたため，私は直接お会いできず，ラップの収集は来年度以降にまわすこととなった。

収集の予算がきまった時，その総額をすぐにレヒトネン博士に連絡し，この額でどの程度の収集ができるかを打診した。直ちに，その総額を物品購入費，人件費，送料，予備費，に分配した一覧表がとどいた。それによってヨーロッパにおける収集活動のための予算分配の常識がわかった。即ち，全体の半分を純然たる物品購入費にあて，残りの半分を人件費，送料，予備費に分けていた。その後半の内訳はほぼ，人件費⅓，送料⅓，予備費⅓である。％で表わすと 50% 物品購入費，25%人件費，15%送料，10%予備費，となる。この中でわれわれの目からはひどく高額と思われる人件費は，現地で話しているうちにやっとわかったことだが，収入の半額は税金にとられるという北欧福祉国家の条件によるものであった。

ヘルシンキの空港で私を迎えてくれたのは，ヘルシンキ大学の庄司博史君であったが，この大学の内部についてくわしい情報を得たのは庄司君のおかげである。彼の専攻はウラル・アルタイ言語学であり，正式の学生として単位を揃えていた。この大学は日本の大学のようなトコロテン式でなく，学年，あるいは何回生という意識が少なく，卒業資格を得るに必要な単位をそろえるまで，ゆっくりやるのが常識となっており，平均5年位かかる由であった。特にヨーロッパにおけるウラル・アルタイ学の本山として，学生は各国から集まり，フランスのみならず，アフリカの学生も見られた。レベルは非常に高く，学生手帳には，単位をくれた教授による評価がいちいち直筆で書かれ，学生手帳の提示は直ちに通知簿——それもコメント付きの——の提示になるという極めて厳しいものであった。ブレティンを見ると，東大や京大の言語学科よりもウラル・アルタイ関係の講義が多く，街の雰囲気，人情ともに学問をするに極めて良い環境である。特に印象に残ったのは街の中心にあるアカデミー書店で，ここには高度の専門書が見事に揃っており，さすがヨーロッパの学都ヘルシンキの感を深くした。この店は有名な教授が顧問をしている由であった。新聞も各国のものを買うことができ，フランスのような唯我独尊的なところがないのも快い。このような良い環境の上に，庄司君は可憐なフィンランド人の奥さんと結婚して暮しているのでフィンランド語は全く自由で，私はずい分とおかげをこうむった。

もう1人，特にお世話になったのはレヒトネン氏が私のために待機させておいてくれたニーラネン君である。彼は大学院の学生で民族学専攻，ひとが5年かかる過程を3年で済ませ，まもなく修士を終えるという非常な秀才であった。何よりも人物が明るく，私との間に話がつき

ることがないという申分のない人であった。このように全く異なった文化の中で非常に気の合う人物に出くわすことがときどきあるのは，まことに不思議である。

外国へ行って文化ショックを感じないということは原則としてないはずであるが，私にとってフィンランドはその例外で，ショックがないのにむしろ驚いた。この国の人達は，ひかえ目で，まじめで，心からの笑顔を持っている。暗い北国と思って来てみると意外に人々は明るく，時に楽天的でさえある。けっこう話し好きでもあるが，それは地中海人のあの饒舌ではない。時に湖に浮ぶ鳥影に見とれていると，話すのをやめてそっとしておいてくれたりする。それがうれしい。日本を逃れ，シベリアを旅して来た若者が，この地に来て心の安らぎを得，去りがたくなって，パリもロンドンも見ぬままにここで年月をすごしてしまうのがわかる気がする。

古道具屋の主人も，むしろ学者であり，あちこちに分散した倉庫を案内しながら，まさに親身になって展示向の民具を探し出してくれた。その時について来て手伝った若者達も実に感じがよく，(買物は済んだ，それではさようなら）という気になれない程で，それぞれの人に個人としての愛着をおぼえた。ここでは誰もが自然で，通過儀礼を強いられた気分などついに味わわなかった。私は日本をふと思い出して逆に文化ショックを感じたものである。

さて民具は，それが用いられる場がわからないと，結局美術品なみに飾ってしまう。フィールドで長い間暮し，そこでなじんだ民具を見ると，それが置いてあった部屋のたたずまいから，それを使っていた人の面影まで浮んでくるのであるが，しかし，そのような体験なしに収集した「もの」は展示の際，どう置くべきか甚だ心もとないだろうと思われる。従って，今回のように大急ぎで収集をする場合は，フィールド体験の不足を取敢えず博物館の見学によって補い，その背景をつかむより他になかった。

この条件をよく理解したニーラネン君は，収集のスケジュールのあいまに各種の博物館見学を組込み，おかげで月曜日から金曜日まで，毎週ぎっしりつまったスケジュールができてしまった。一日おきにしてもらうんだったと考え直した時はもうおそく，フィンランドでの生活は民博なみの忙しさでスタートしてしまった。彼はまず最初に私達を国立博物館に案内し，綿密なウラル学のインテンシヴ・コースを始めた。

国立博物館はさすがにフィンランドのほこる博物館で，民族学関係の展示にかなりのウェイトがかけられているが，それが当然のこととはいえ，フィノ・ウグリア民族（ウラル民族という用語よりよく用いられている）の線を強くうち出していて，解説の地図や写真も遠くウラルの彼方に向けて民族のイメージを拡げている。それは今にも北海道に達しそうな寒帯アジアの文化圏であり，ラムステッドが朝鮮や日本を指向したのも，ごく自然に感じられる。後に述べるようにフィンランド文化は言語を除けば，まったくのヨーロッパなのであるが，民族を意識した視線は東を向き，私自身この博物館の中にいて日本とフィンランドがひどく

近く感じられた。南まわりでヨーロッパに至る道の遠く多彩な文化を思うと，それはまことに対称的である。この博物館の中で行なわれたウラル学インテンシヴ・コースは私にとって民具におとらぬ収穫であった。印象に残ったのは寒帯の狩猟用具，衣裳，素朴な室内であったが，この他に考古学の資料はすばらしいものがあった。

私はあるホテルの受付で Finnish Museums というパンフレットを見つけた。これにはフィンランド国内のすべての博物館がほぼ1ページに2つの割合で解説してある。この種のものはフランスでも簡単に手に入ったが，日本ではどうも見た憶えがない。少なくともホテルのフロントなどで簡単に手に入るようにはなっていないように思う。これによるとフィンランドには1973年の時点で275の博物館がある。即ち：

Finnish Museums	275
Historical Museums	
National Museum	1
Provincial Central Museums	11
City and District Museums	45
Rural Local History Museums	117
Art Museums	37
Natural History Museums	16
Technical and Industrial Museums	10
Special Museums	
Agricultural Museums	2
Applied Art Museums	5
Bank and Customs Museums	5
Church Museums	3
Handicraft Museums	3
Hotel and Shop Museums	2
Medical History Museums	3
Military Museums	6
Musical Museums	2
Photographic Museum	1
Railroad Museums	2
Sports Museum	1
School Museums	2
Theater Museum	1

フィンランドの人口は470万で日本の約20分の1であるが，博物館の数は日本より多い。因みに朝日年鑑の1975年版を見ると，日本の博物館は美術館を含めて273となっている。勿論，人口の割で博物館を建てていたら狭い日本は大変なことになるであろうが，ともかくフィンランドでは，フランスにおけると同様，一般の人々の博物館に対する理解の程度が高く，収集活動の上でも便宜が多かったのは事実である。

フィンランドの博物館のうちで，民族学の立場から最も重要なものを5点あげると，既に述べた(1)ヘルシンキの国立博物館のほかに，次のものがある。

(2) ヘルシンキの野外博物館「セウラ・サーリ」
　大型家屋と最も古い型の住居，舟

(3) ヘルシンキ大学の農業博物館
　農具の類型分類とその国内分布研究

(4) トゥルクの野外博物館「ルオスタリンナマキ」
　各種職人の技術，道具，仕事場，住居

(5) タンペレの民族音楽博物館
　民族音楽のテープと楽器のコレク

ション

フィンランドで収集した民具124点をアチック・ミューゼアムの分類に従って示すと次の通りである（但し書籍・レコードを除く）。(数字は整理番号)

1. **衣食住に関するもの**

1.1. 家具

(家具)［椅子[6,84,85,86,87,191]/長椅子ベッド[82,187]/食卓[83,192]/三角戸棚[94]/釣戸棚[189]/ゆりかご[188]/衣裳入れ[10]/木製トランク[195]］

(織物)［北欧じゅうたん[17]］

(洗濯道具)［巻き棒[9]/しわ伸しロール[8]］

(室内装飾品)［ボビンレース[42-44]］

1.2. 灯火用具

(馬屋用ランタン[74]/漁業用かがり火台[5]/ろうそく[手製][184]/〃[円型][96]/〃[長型][97]/ろうそく立て[95]/〃[手製][181])

1.3. 調理用具

(暖炉)［自在鍵[11]/鼎[13]/鍋鍵[16]］

(うつわ)［鉄鍋[12]/やかん[76]/蓋付土鍋[88]］

(器具)［砂糖切りばさみ[81]/コーヒーひき[1]］

(食卓)［タブレット[197,199]］

1.4. 飲食用具

(ビール桶[ジョッキ][75]/砂糖壺[89]/平皿[90]/深皿[91]/コップ[92]/グラス[93]/鉢[194]/木製ジョッキ[177]/とします板皿[176]/大型水筒[77])

1.5. 服物

(［ユルバ民族衣裳］ブラウス[18]/ベスト[19]/スカート[20]/靴下(白)[21]/つり下げポケット[22]/帽子[25]。［コイヴィスト民族衣裳］ブラウス[27]/上衣[28]/エプロン[29]/スカート[30]/靴下(白)[33]。［サキュラ民族衣裳］シャツ[35]/ベスト[36]/半ズボン[37]/靴下(赤)[38]/帽子[40]。農民服[182]/農民帽子[183])

1.6. 履物

(ユルバ靴[26]/コイヴィスト靴[34]/樺樹皮の靴[41])

1.7. 装身具

(ブローチ[ユルバ服用[23]/コイヴィスト服用[31]/サキュラ服用[39]]。リボン[ユルバ服用[24]/コイヴィスト服用[32]]。古典ブローチ13点[201])

1.9. 衛生・保健

(サウナ用具［サウナ桶[170]/ひしゃく（木製短柄)[171]/〃（木製長柄)[172]/〃(銅製木柄)[173]/摩擦袋[174]/ブラシ[175]/タオル[178]/小物かけ(木の枝製)[179]/〃(短枝製)[185]/けものおどし(カレリアの木のベル)[186]/ポスター[180]］)

2. **生業に関するもの**

2.1. 農具

(すき[45]/種まきバスケット[63]/小鎌[71]/鍬[72])

2.3. 狩猟用具

(おとり（黒雷鳥)[80]/わな（小動物用)[200])

2.4. 漁撈用具

(熊手型モリ[4]/かがり火台[5])

2.5. 紡績用具

(糸より器[2]/亜麻剣山[3]/糸巻き棒[7]/糸つむぎ車[46]/はた織機[47-62]/大はさみ(羊毛用)[67])

2.6. 畜産用具

(牛の鈴[73]/馬の首かせ[193])

2.7. 交易用具

（ます[64]）

2.8. 大工用具

（すじ引き[14]/かんな[69]）

3. 運搬に関するもの

3.1. 運搬用具

（樺樹皮のリュックサック[79]/そり（子供用）[190]）

6. 信仰・行事に関するもの

6.4. 楽器

（カンテレ琴[198]/樺樹皮の角笛[199]）

以上はアチック・ミューゼアムの分類に従ったものであるが，材料による分類を考えると北欧的特徴として，一群の樺樹皮製品がある。即ち，バター入れ，リュック・サック，靴，角笛，などであって，これらは北欧的自然環境と，それへの適応が感じられる。また，サウナ用品も一群を作る。これは多少とも商業化されているが，他で手に入りにくい古いものが，機能だけを変え，外形は古いままで用いられている場合がある。たとえば「カレリアの木鈴」は，もと「けものおどし」に用いられていたものであるが，現在はサウナの準備ができた時の合図に用いられている。また，以前はおかゆをかきまわすのに用いていた木の枝は現在サウナ更衣室の小物かけとして形を留めている。

フィンランドの収集を終え，発送の手続もすっかり済ませて明日はパリに発つという9月16日，たまたま原色版のスエーデンの民具の本を見つけた。その図版を見て行くうちに私は愕然とした。ほとんどが私の収集したフィンの民具と同じなのだ。できるだけ純粋にフィンランドのものを，と言って集めたつもりであった。明日出発という時だけに，一瞬，走り廻って過した1月半の努力がむなしかったかのように思えた。

この瞬間，私はヨーロッパにぶつかったのだと思う。このヨーロッパの実感は身にこたえた。この後，私はフランスに渡り，幾度か思い知らされるのである。フィンランドが何のペリフェリーぞや。まったくのヨーロッパではないか，と。しかし，ここで一言冷静に付言しなければなるまい。言語と文化はイコールではない。フィンランドの文化はまさに西欧であるが，言語はウラル，つまりアジアに連なるものだ，と。つまり，フィンランドの持つ2つの顔が実感としてわかったのである。